

## シャロレ伯爵 (9)

リヒャルト・ベアー＝ホフマン著  
松川 弘\*・訳

(平成30年10月19日受付)

### Der Graf von Charolais (9)

von  
Richard Beer-Hofmann

Aus dem Deutschen  
von Hiroshi MATSUKAWA

(Received Oct. 19, 2018)

宿屋の主人：  
(肩をすくめて)  
なぜ私が嘘をつかなければならないんです？

(自由になろうとして、のたうち回る)  
本当に、何も知らないんです！ 放して下さい！ 私がど  
うしてこんな目に遭わなければならないんです・・・

シャロレ：  
その老紳士は、独り言ばかり言うのかい？ 声が聞こえた  
ぞ！

シャロレ：  
(根気強く)  
あの中に誰がいるんだ？

宿屋の主人：  
(わざと厚かましく)  
私は存じませんよ！ お客さんでも来てるんでしょう！

宿屋の主人：  
(わめき立てる)  
放して下さい！ 私の手首をへし折る気ですか！ 人を呼  
びますよ！

シャロレ：  
(彼の手首をつかんで、固く握り締める。脅迫するように)  
嘘をつくんじゃない！

シャロレ：  
(宿屋の主人の両手首を、一気に、一方の腕で抱え込み、も  
う一方の腕を、彼の口に押し当てる)

宿屋の主人：  
中に誰がいるのか、どうして私に分かるんです？ 痛い  
ですよ！ 私には関係ありません！ お客が通りかかって  
も無視してるんですから・・・  
(痛さのあまり、ほとんど泣き出しそうになって、次第に早  
口で)  
だから放して下さい！ 中で起こってる事なんか、知りた  
くもありません！

こうすれば呼べないだろう！  
(宿屋の主人は、腰砕けになる。シャロレは、彼の上に屈み  
込む)  
今吐き出した嘘を、もう一度飲み込みたい！ また息が出  
来るようにしてやる！ もしも、お前の最初の息が真実で  
なかったら、叫び声を上げる前に、お前を絞め殺してや  
る！ 私の家内はあの中にいるのか？！  
(宿屋の主人を放してやる)

\* 広島工業大学工学部電気システム工学科

宿屋の主人：  
(あえぎながら)  
ええ！

シャロレ：  
(よろめいて机にもたれかかり、膝を震わせる。宿屋の主人は、あえぎながら床からフラフラ立ち上がる。シャロレも身を起こして、激しく首を振って、窓の方を見る。それから、宿屋の主人に向かって、そっけなく)

こっちに来い！  
(主人の腕をつかみ、大股で、彼を引きずって行き、窓に通じる階段のところで立ち止る。以下のやり取りは、非常に早口で交わされるが、はっきり、心に迫るように響く)  
あそこの建物、あの聖堂の前の建物だ！ 分かるか？

宿屋の主人：  
(何にでも応じる心積もりで)  
はい！ 宰相邸ですね！

シャロレ：  
お前は、今からあそこへ行くんだ！ 窓から灯火が漏れてるだろう？ 会議が開かれているんだ。あそこに裁判長がいる！ 走って行くんだ！ 私の名前をあげれば、下僕がお前を彼のところに連れて行ってくれるはずだ。いや、お前のところに彼を呼び出すんだ！ そして、彼に、私の使いで来たと言うんだ！ そうすれば、彼はここにやって来るだろう！ すぐ行くんだ！ 彼を会議室に戻らせるな！ 彼が質問したら、私に指図されたこと以外は何も知らないと言っておけ。私がここにいと、彼にそっと耳打ちするんだ！ 私が彼を必要としていると、生きるか死ぬかの問題だと言うんだ！  
(今まで腕で押え込んでいた宿屋の主人を放し、彼を、一気に、階段のところに押し出す。主人は、ドアに向かって走り出す。彼がドアを開けようとした瞬間、シャロレは叫ぶ) 待て！ 老人に、これ以上のことは言うなよ！ 彼が尋ねても黙ってるんだ！ お前は何も知らないんだ！ 指図されたこと以外は、一言も言うんじゃないぞ！ 早く、復唱してみろ！

宿屋の主人：  
伯爵が宿屋におられます・・・

シャロレ：  
(上方に、苦しみと非難がない交ぜになった一瞥をくれてうなづく)  
ここにだぞ！

宿屋の主人：  
そしてあなたを必要とされておいでです・・・

シャロレ：  
(うなずいて、一心不乱に、腕を胸に押し当てる)  
必要なんだ！

宿屋の主人：  
すぐにおいで下さい。生死にかかわる・・・

シャロレ：  
(身を起こして、よく響く声で)  
生きるか死ぬかの問題なんだ！ その通りだ！ 行ってくれ！

(宿屋の主人は、走り去る)

シャロレ：  
(彼を見送り、物思いに沈んで)  
もし彼が・・・  
(子供が眠っている部屋の戸口に慌てて駆け寄って)

ロモント！  
(ロモントが出てくる)  
彼の後を追いかけて、裏切らないかどうか見届けてくれ！ 警告代わりに、窓に石を投げつけるんだ！ それから入口を見張ってってくれ！ 彼女の父親以外は誰も上がらせろじゃないよ！ 彼だけだぞ！

(ロモントは急いで出て行く)  
彼だけだ！ 子供は部屋の中だ！  
(勝ち誇ったような声で)  
彼らは——二人とも——ここにいる！  
(廊下の方を振り向く。無理に気を静めようとしながら)  
彼がここに来るまでは、何もするまい！  
(廊下を半ば隠しているカーテンを引いて、完全に閉める。カーテンを背にして、そのすぐそばに立つ)

待つんだ！  
(無理に気を静め、ほとんど直立不動になる。頭を後ろに反らせ、こぶしを固め、垂れ下がった腕を体に押し当てる)  
今は、ただ待つんだ！

(落ち着きを取り戻す。急に廊下の方に聞き耳を立て、耳をふさぎ、叫びを押し殺して)  
何も聞きたくない！ 耳をふさいでいたい！ 待つんだ！  
(息苦しうに立たずみ、意に反して廊下の方に聞き耳を立てる。突然、カーテンを引き開けて、廊下に駆け込む)  
開けろ！

(彼がこぶしでドアを叩く音が聞こえてくる)  
開けるんだ！ そこにいるのは誰なんだ？ 彼女には、私

が誰だか分かるはずだ！ 開けろ！

（彼が体を押し付けているドアのきしみが聞こえる）

開けろと言ってるんだ！ 開けないのなら、仕方がない！

（ドアが壊れる音と、叫び声が聞こえる）

こっちへ来るんだ！ この泥棒め！ 俺が出かけるのを待っていたんだな！

（廊下から、シャロレが背中を見せながら出てくる。彼はフィリップと格闘する。フィリップに抱き付いて、廊下から引っ張り出そうとする。フィリップは、死に物狂いで抵抗し、片手を自由にして、シャロレから身をもぎ離そうとする）

シャロレ：

その指で、お前は、俺の顔に泥を塗ろうとしたのか？

この泥棒め……

（格闘しながら、彼らはカーテンに近づく。シャロレは、フィリップを膝で壁に押し付け、一方の手でフィリップの手首を抱え、もう一方の手でフィリップの喉を押える）

この泥棒め！

（フィリップの首を絞め、頭を壁に押し付ける）

俺を打とうとでもいうのか？

フィリップ：

（喉をゼイゼイ鳴らす）

聞いてくれ……

シャロレ：

もう聞いたさ……

フィリップ：

放してくれ！ 僕はただ……

シャロレ：

（すでに気を失ったフィリップの首をなおも絞め付ける。彼を揺さぶり、彼の頭を壁にぶつける）

もうだめだな！ 泥棒め！ もうお前は……

（シャロレは、目を大きく見開いてフィリップを凝視し、急に彼を離す。フィリップの死体は、壁を滑り落ち、この落下で、死人の手がつかんでいたカーテンが裂ける。シャロレは一步後ろへ下がる）

やつはもう終わりだ！

（一瞬、うろたえて死人を凝視するが、また激しい怒りに身を震わせて、廊下の方に向かって叫ぶ）

今度はお前だ！ 出て来い！ こっちに来たくないのか？ 出て来なければ、下の厩舎から馬丁を連れて来て、引っ張

り出させるぞ！ 俺は、お前に手を触れるのも嫌なんだ！

出て来い！ どうなんだ！

（叫び声が聞こえる）

心配するな！ 奴は気を失っているだけだ！ 彼を踏みつけてみる！ 明るい所に出て来るんだ！ 早くしろ！

（今まで、廊下のデジレーの姿は、観客からは見えなかったが、彼女は、まるで投げ飛ばされたかのように、突然、廊下の敷居に転がり出てくる。着衣の乱れを隠すために、彼女の腕は、胸の上で組み合わされている。彼女の髪は、半ば解け、頭は後ろに反り返り、むき出しの首から、ちぎれた真珠の首飾りが垂れ下がっている。彼女の目は凍りついている。話そうとするが、声が出ない。彼女は、壁にもたれかかって、あえいでいる）

デジレー：

私、私は……

シャロレ：

（怒りに我を忘れて叫び、彼女に向けてこぶしを震わせる）

お前って奴は……！

（気を落ち着けようとする）

黙って待っている！

（入口のドアがサッと開く。正装した裁判長と、彼に続いて、ランタンを持ったロモントが入ってくる。デジレーは叫び声を上げて、くずおれる）

裁判長：

（息を切らせ、あえぎながら）

ここで何が起こったんだ？

シャロレ：

大したことじゃありません！ あそこに奴が、死体になって転がっています。彼女と同じ寝台にいるところを見つけたんです！ あなたは……

裁判長：

何ということだ！

シャロレ：

（彼とデジレーのあいだに割り込んで）

別れを告げるには、遅すぎます！ 今あなたがすべきことは……

裁判長：  
何だと言うんだ！

シャロレ：  
あなたがしなければならないこと、それは裁くことです！  
(入口のドアのところに行き、ドアを閉めて、鍵を懐に入れる。それから、ロモントに向かって)  
これで全員揃った。我々だけにしてくれ！  
(ロモントは、ランタンをテーブルの上に置いて、子供が眠っている部屋に入り、ドアを閉める)

シャロレ：  
(デジレーの方を向いて)  
起きるんだ！ 裁判官の前にいるんだぞ！

裁判長：  
(デジレーのところのにじり寄り)  
放してくれ・・・息が出来ない・・・  
(あえぎながら、肩から重いマントをもぎ取ろうとする)

シャロレ：  
(裁判長の邪魔をする)  
正装のままでいて下さい！ あなたは今まで、まだそれほど高い位についているとはいえませんでした！ 今日までのあなたの振舞いは、いわば習作にすぎなかったのです！ あそこの死人が、今日、あなたに傑作を物させてくれるでしょう！ その職で！

裁判長：  
(改めてデジレーの方のにじり寄ろうとするが、またしてもシャロレに阻止されて)  
あの子のところに行かせてくれ！

シャロレ：  
まだだめです！ まず、あなたの判決を！

裁判長：  
(デジレーのもとにたどり着こうとする。シャロレに押し退けられて、宿屋の主人の部屋に通じる階段の一段目に立つ。彼の顔は、デジレーの方に向けられている。観客には、彼の白髪と、ひどい皺をなして階段の上に垂れている赤いマントしか見えない)  
邪魔しないでくれ・・・私は、あの子の父親なんだ！

シャロレ：  
(彼のすぐそばに歩み寄って)

あなたは、裁判官なんですよ！ この国で最高の！ ご自分の身分というものを考え下さい！ 彼女も私も、みんなあなたの支配下にあるのです！

(次第に性急に、言葉を渦巻のように噴出させて)  
外の通りを歩いたり馬で行ったりする者、市場に群がっている者、衰弱して教会の戸口でうずくまる者、領主とお近づきであることを誇りにしている者、隠れた谷の低い百姓家に黙って住んでいる者、数知れずうごめく貴族や市民、農民の類、彼らはみな、あなたの支配下にあるのです！ 他のすべてが当てにならないとき、彼らは、あなたの前に歩み出るのです！

(自分自身の苦痛を自覚しながら)  
哀願するようにあなたを見上げる、打ちひしがれた者たちの究極の願いは、不正の与えた苦痛を、あなたが、彼らの心から消し去ってくれること、彼らに、神への信仰を取り戻してやることなのです！

(マントの縁をつかみ、それを高々と差し上げる)  
この緋色のマントとオコジョの毛皮は、あなたが神の恩寵、神の正義を現世で司っていることを象徴しているのです！ (マントの縁を放す。自分の胸を打撃にさらすような身振りで)

判決を！

裁判長：  
君の望みは、何なのだ？ 私には、全く分からない・・・

シャロレ：  
彼女に尋ねてみて下さい！  
否定しないはずですよ！ さもなくば、言い訳をするか、何か嘘をつくでしょう・・・

デジレー：  
(身を起こして)  
私は嘘はつきません！  
嘘をついたことは、一度もございません！

シャロレ：  
(急に笑い出す)  
誇りか？ お前にも、誇りがあるのか？！  
それじゃ、言ってみろ！ 自分の言うべきことを言ってみろ！ 嘘はつくんじゃないぞ！ 真実を言うんだ！ お前をあそこの死人のもとに駆り立てたのは何か、言ってみろ！ 自己弁護するんだらう！ 言ってみろ！ 俺は、お前に押し付けられたんだらう？ 俺が来る前から、お前は、あの男を愛していたんだらう？

デジレー：  
（子供のように頭を振って）  
違います！

シャロレ：  
違う？ それじゃ、俺は後から嫌われたのか？ 俺がそばにいと、吐き気がするのか？ 俺の体はそんなに不快なのか・・・

デジレー：  
（嘆願しながら）  
やめてください！ 私は恥じているんですから！

シャロレ：  
口先だけだろう！ よし！  
ここに、お前の裁き手がいる！ 彼の前では、恥らいは無用だ！ すべてを彼に打ち明けるんだ！ 弁解を申し立ててみる！ もしそれが役に立つのなら、夫婦の契りの内奥を引っ張り出して、広げてみる！ 俺は無気力だったか？ 俺の精力は早く萎えすぎたのか？ 俺の抱擁は、お前には熱すぎたのか、それとも、冷たすぎたのか？ おれの優しさは、穏やかすぎたのか、それとも、獣のように荒々しすぎたのか？

デジレー：  
（大声で叫ぶ）  
あなたは私をののしり殺す気ですか！

シャロレ：  
（歓声をあげて）  
出来れば、そうしたい！ お前を抹殺してしまいたい！  
（苦しげに、胸を叩いて）  
この場で！

（裁判長に向かって、救いを求め、哀願するように）  
私の心の中には、彼女の他何もなかったのです！ 父親の死も、忘れることが出来たのです！ 彼女が来る前に存在した物は、色あせ、煙となって、霧の中に永久に沈みました！ 時間が、日が、すべてのものが、彼女の到来とともに新たに始まったのです！ すべてが互いに境を接し、その嵩を増し、彼女の行為、まなざし、言葉で満たされました！ 彼女の吐息はすべてを貫通し、私の思考も、彼女に始まり、彼女に終わりました！ これが、あなたの腕から私が、乞食のようにこの膝に受け取った、あの女だと、お信じになりますか？ 我々が切望したものは、まず渴望を、それから陶醉を、最後に嫌悪を、我々にもたらしたのでしょうか？ 降り注いだ陽光の中に、私は初めて彼女を認

めました！ 幸福というものを、私は知りませんでした！ ご存知のように、子供の頃から、私のまわりには、血や惨劇が山をなしていたのです！ 彼女が微笑むと、純潔に育まれ、あなたの穏やかな愛情のもとで成熟した彼女の平和な人生が、私の中に流れ込みました！ 彼女が朝、目蓋を開くと、彼女の目の中には私がおり、その背後の奥底に、私のためなら喜んで身を捧げる彼女の、豊かで無限の本質が潜んでおりました！ 不気味な恐怖が忍び寄り、すべての生き物のもつ始源的な不安が我々の心の奥底から湧き起こり、その大きな口で我々を飲み込もうとする、あの夜、眠りがオズオズと身を隠し、上の方から黒い巨大な翼をもった灰色の怪物が我々の頭上に舞い降りてくる、あの夜、私は彼女の許に逃れたのです！ 私の回りには、暗闇から奔流がごうごう音を立てて流れ出し、妬みや悪意、憎しみの荒い息遣いが聞こえていました。見開かれた眼からは、苦悩と悲惨が、崩れかけた吐き気を催させる病床からは、死が、じっと私を見つめていました！ 私には、すべてが科せられていたのです！ 彼女が、彼女だけが、慰めと安らぎを与えてくれました！ 私の首に絡み付く彼女の腕が、私を守ってくれました！ 彼女の吐息は平穩を、彼女の唇は幸福を、彼女の肢体は期待をあらわしていました！ 彼女と一つになるために、彼女の中に逃れるために、私は彼女を抱き、彼女にすがりついて、私の生命を彼女の中に流し込みました。これが、死にたいする私の答えだったのです！ そして・・・

（彼は、話し続けることが出来ず、首に手をやって、ワイシャツのカラーを引きちぎり、あえぐ）

私にはもう無理です・・・

デジレー：  
（シャロレが話している間に、彼の本意を本能的に理解する。頭を後ろに反らせて、幸せそうな微笑みを浮かべ、腕を広げて）

話し続けて下さい！  
私はあなたを愛していました！ あなただけを！

シャロレ：  
俺は求めてるんじゃなく、責めてるんだ！ 彼女は信頼を裏切った！ あらがいもせず、子供のように無心で信じ切っていた俺の信頼を、彼女は絞め殺したんだ！ もしも彼女が俺に毒を、毒だとすぐ分かるものを手渡し、「これは毒じゃありません。お飲みなさい！」と言ったら、俺はそれを飲み干していただろう！ これは単なる比喩じゃない！ 現実の毒が、彼女の腕から現実的に、俺に手渡されたら、俺はこうして・・・

（飲み物を一気にグッと飲み干すような仕草をして）

それを飲み込むだろう！

裁判長：  
(上げた手をもみ合わせて)  
お願いだから・・・

シャロレ：  
(避けるように首を振る)  
何も、あなたが私に頼むことはありません。頼むのは私の方で、あなたは許可して下さいがいいのです！ 私はあなたに、自分の権利を求めているのです！

裁判長：  
私にそれを求めても無理だよ・・・

シャロレ：  
あなたを措いて他にはいないのです！ あなた以上の裁き手を、私は知らないのです！ それほどまで彼女の事を知っている者が他にいるのでしょうか？ 声の響きで、あなたには、彼女が嘘をついているかどうか分かります。黙っていても、彼女のまなざしが、黙秘している事をあなたに漏らします。そして、彼女が眼を伏せていても、子と親の間を引き裂くことのない何かが、空気を通して、不可視の答えとして、有無を言わず求められ、受け容れられるのです。

裁判長：  
(哀願するように)  
分かってくれ！ 君が望んでいることはみんな、今ここでは、この場では無理なんだ！

シャロレ：  
(高笑いする)  
ここに白羽の矢を立てたことが、私の意向だったとでも言うのですか？ あの男は、ここがお気に入りなんです！ 彼に感謝なさるんですな！

裁判長：  
(デジレーに向かって)  
こっちに来て、父さんに話してみなさい・・・

シャロレ：  
私をよく見てください！ あなたには見分けがつかますか？ つい今し方まで、私は、自分の跡継ぎのために、館を造営し、広い庭に植樹していたんです。私は、朗らかで、落ち付いており、心豊かでした！ つい先程まで、思い上

がった私は、我々がいるこの家のことが、嫌で嫌でたまらなかつたのです！ あなたにはお分かりでしょうか？ 私は、地所を、財産を、金の鎖を、高慢を、指輪を、拍車を捨てたのです！ 私はここに、かつてと同じように、貧しく、無一文で立っているのです！ 私に残ったのは、剣と権利だけです。この二つしかないのです。私の権利をお認め下さい・・・

(テーブルの上に置いてある剣に手を伸ばす)  
さもないと、私は、自分に残されたもうひとつの物、剣で、それを奪い取ります！

裁判長：  
私は裁きたくない、彼女を裁くことなど、私には出来ない！ 私は彼女の父親なんだぞ！

シャロレ：  
私だって父親です！ 私がもしそうでなかったら、足で彼女を蹴り飛ばしてやるところです！ この子のために、この私たちの子供のために、ここで、異論の余地なく正義が行なわれねばならないと思うのです！

デジレー：  
お父様！ この人の思い通りにさせてあげて下さい！

裁判長：  
裁くことなど、この私には出来ない！

シャロレ：  
出来ないですって？ 今日、この場で判決を拒まれるのなら、あなたの一生は、一体何だったのですか？ どんな権限があつて、あなたは、人々を、太陽の下から暗闇の中に、湿った石の中に永遠に封じ込め、生氣あふれる者を、首をかしげるだけで、苦悩に、不安に、そして死に追いやったのですか？ 神があなたの口を借りて判決を下したのではなかったのですか？ そのあなたの中の神は、今日は口が利けないのですか？ 耳を澄ませてみて下さい！ 神の声を今日、聞き取ることが出来ないとすれば、あなたは嘘をついていた、一生涯偽善者だったということになるんですよ！

裁判長：  
(身を起こして)  
その言い方はないだろう！ この衣装にではなく、この名誉の白髪にたいして敬意を払いたまえ！

シャロレ：

あなたが裁きを下されないのなら、それも名折れです！それに、あなたの衣裳は何になるのです？ カーニバルの仮装じゃないですか！ 貸し主の仕立屋に、そう言ってお返しなさい！ もう、あなたのおっしゃることは何も信じられない！

デジレー：

私を、この私を殺して下さい！ そしてお父様を放してあげて下さい！ 彼があなたに何をしたと言うのです？

シャロレ：

（苦笑しながら）

彼は俺にお前を与えたんだよ！ また俺からお前を奪い取るがいい！ 彼の判決で、俺はお前から解放されるんだからな！

裁判長：

（怒りと苦悩をみなぎらせて）

私は、確かに君にこの娘を与えた！ 君は獣だ、狂った獣だ！

シャロレ：

（いやらしい笑いを浮かべて）

あの時、この女には、さかりがついていたんです！ 私は、犬になりました。発情した犬にね！ 私は、あなたの判決が、今、喉から手が出るほど欲しいんです！

裁判長：

（脅かすように）

何度言ったら分かるんだ！ 早くドアを開けて、我々を解放したまえ！

シャロレ：

何度言ったら分かるんです！ そこのドアは、あなたの判決が下りさえすれば、開くんですよ！ あなたは、私にとって、最高の裁き手なんです！ あなたと神の間には、もう誰もいないのですから！ 私が先ほどあなたに言ったことを、よく思い出して下さい！ あなたは、私が彼女と天国で神の前に進み出て、正義が行なわれるよう求めることを、お望みなんですか？ 私にはその用意があります！ その方が、あなたにはより都合なんですか？

（平静を装って）

それじゃ、言って下さい！ あの男と同じ寝台にいる彼女を見つけたときに、私があつた男と私の妻を打ち殺すのは、正しい行為なのですか？ 彼女は、死に値するのですか？

このことだけを、お尋ねしたいのです！

デジレー：

答えて下さい！ 私に構わずに！

裁判長：

（口ごもりながら）

君の行為は正当だろう・・・

シャロレ：

（拒絶するように、早口で）

何も条件を付けずに！ 簡単明瞭に！ この腕が動き出さないように、これ以上じっと堪えていられるという保証は出来ませんからね！ 言って下さい！ 彼女は、死に値するのですか？

裁判長：

（うなずき、すべてを認める覚悟を決め、小声で）

値する！

シャロレ：

（強情に）

はっきり言って下さい！

裁判長：

死に値する！

シャロレ：

（ホッと息をつく。デジレーの方に首を向け、彼女を見ずに）

聞いたかね？

デジレー：

（うなずく）

聞きました！

シャロレ：

（ひじ掛け椅子に腰を下ろす）

さて、待つとしよう！

デジレー：

（彼の言うことが理解出来ずに）

何をです？

裁判長：

（急き立てるように）

何も聞かずに、こっちへ来なさい！

(シャロレに)

ドアを開けてくれ！

シャロレ：

たった今、お前の父親が宣告した刑を、俺がお前に執行しなくても済むようになることをさ！

裁判長：

(彼女を、一緒にドアのところへ引っ張って行こうとする)  
この娘の父親だって？ 彼は、あの男の言うことは聞くん  
じゃない、と言ったんだ！

デジレー：

(裁判長から身をもぎ離し、ゆっくり、無表情で前方に歩み  
出す)

私は、この人の言うことを聞かなければならないのです！

彼は、私の夫なんですから！

裁判長：

(小声で、不安をみなぎらせて)

その男に近づくんじゃない！ 彼をよく見るんだ！ 死が、  
彼の眼の中で、機をうかがっている！

デジレー：

(落ち着いて)

それでも、私は行かねばなりません！

(彼女は、シャロレの椅子のそばにたどり着き、顔をランプ  
の方に向けながら、がっくりとひざまずく。シャロレは、  
彼女の方に顔を向け、彼女を見つめる)

シャロレ：

(小声で)

お前か？

(彼女はうなずく。彼の悲しみは、怒りを凌駕したように見  
える。落ち着いた、しかし悲痛な口調で、彼は話し始める)  
何というざまだ！ 一体何が、高慢なお前を、ここに、こ  
の家に連れ込んだんだ？

デジレー：

(頭を揺すりながら)

分かりません！

(探るように)

あの人は言ったんです……

シャロレ：

(ギクリとした目つきで、しかし相変わらず小声で)  
あいつが言った？ 口先だけじゃないか！ その言葉が  
お前をここに連れ込んだってわけか！ その言葉が、お前  
をこんなにも墮落させたのか！ どん底まで！ そして、  
恐らくもっと深くまで……

デジレー：

(眼を上げて)

墓場まで、という意味ですか？

シャロレ：

(うなずいて)

さすが機知に富んだお前だけに、うまく言い当てたな！  
その通り、「墓場まで」だ！

デジレー：

(眼を見開いて、乾いた声で)

私には、死に方が分かりません！

シャロレ：

(辛そうにうなずいて)

でも、殺し方は知ってるだろう！ 分かっているはずだ！

裁判長：

(不安そうに聞き耳を立てながら近づく)

お前たちは、何をひそひそ話しているんだ？

(手を貸して、彼女を床から立ち上がらせる)

来なさい！

(小声で)

彼の落ち着きが、わたしには気懸かりだ！ 来なさい！

(シャロレに向かって、性急に)

お願いだから、ドアを開けてくれ！ 判決を下したら、ド  
アを開けてくれると、私に約束したはずだ。その約束を  
守ってくれ！

シャロレ：

(身を起こして、デジレーに向かって)

それじゃ、お前は出て行きたいんだな！

デジレー：

(父親にドアの方へ引っ張られながら、なおもシャロレの方  
を向いて、か細い声で、弁解するように)

私は生きていたいんです！ 私には子供がいます！



シャロレ：  
もう手遅れだ！ 行くがいい！ 子供をここに残して！

(デジレーと、子供が眠っている部屋のドアに向かって駆け出す)

デジレー：  
(彼の言葉の意味がわからず、びっくりして)  
どうして、ここに？ 子供は一体どこにいるんですか？

シャロレ：  
(命令するように、大声で叫ぶ)

ロモント、気を付けるんだ！  
(彼が叫ぶやいなや、ロモントは、すでに再び閉じられたドアの前に立っている。彼は、ドアに背をもたせ掛けて、体と大きく広げた腕でドアを守る。暗闇の中で、彼の姿の輪郭だけが見え、顔は見えない)

裁判長：  
(立ちつくして)  
君は何を言ってるんだ？

ロモント：  
そうしてるよ！ 見ての通りだ！

シャロレ：  
(ドアの方を指し示して)  
あの中で、眠っています！ 私が連れて来たんです！

(シャロレは、落ち着いて前に立ち、ドアの方を見ている。裁判長とデジレーは、次第にロモントに迫る)

裁判長：  
(ギョッと叫ぶ)  
何のために？

裁判長：

どきたまえ！ 私を中に入れてくれ！ そこを退いて、中に入れてろと言ってるんだ！ 私の行く手を遮るつもりか？

シャロレ：  
(厳しく)  
母親がお気に入りの場所に、早めに慣らすためです！

(激怒して)

お前は一体何様なんだ？ 退役兵じゃないか！ 管財人だって？ 出て失せろ！ お前はクビだ！ もう用済みだ！ 出て行け！

裁判長：  
(怒りを募らせて)  
子供と我々を出すんだ！  
(こぶしを握って、シャロレに突き出す)  
この拷問吏め！

デジレー：

(極度に興奮して、ロモントの胸をつかみ、彼にしがみつく。顔を近づけて)  
中に入れて下さい！ 私の子供がいるんです！ あの兎のところに行かせて下さい！ 退いて下さい！

シャロレ：  
(あざけるように)  
なぜ、あなたは、ご自分の職業をそしるんです？  
(ドアに駆け寄って、鍵で錠を開けるが、まだドアは開けない)

ロモント：  
(平然として)  
だめだね！

ドアは開いています。私はあなたを拘束しません！  
(右手前に出る)

デジレー：

(声を張り上げる)

あなたは、どんな権利があって、子供とその母親のあいだに立ちはだかっているのですか？ あなたは誰だと言うのです？

裁判長：  
(かろうじて自制して)  
子供を渡すんだ！

シャロレ：  
だめです！

ロモント：  
(首を巡らせてシャロレの方を指し示し、厳しい口調で)  
彼に好意を寄せている者だ！ それだけだ！

裁判長：  
そうか、それなら、こっちで連れて行くぞ！

デジレー：

(彼の言葉に打たれて、彼を放し、ヨロヨロと後ろへ倒れかかる。それから、シャロレの方を向いて)

遠慮は要りません！ 私を殺して下さい！ あなたの思い通りになさい！ 子供を私から取り上げなさい！ でも、自分と子供のあいだに他人が立ちはだかることに、私は我慢出来ないのです！

シャロレ：

(高笑いして)

なるほど、お前には他人だろう！ 誠実ほど、お前に縁遠いものはないんだからな！

デジレー：

我慢出来ないのです！ 私に加えられた侮辱は、あなたにも該当します。私はあなたの妻で、あなたの一部なのですから・・・

シャロレ：

(腕を後ろに垂らし、苦痛と憧れに身を浸して)

お前は俺のすべてだった！ だが、今のお前は、俺にとって何ものでもない！

(彼は、ゆっくりとデジレーの方に歩み寄る。彼のあざけりや皮肉、憎しみの底には、極めて深い悲しみが流れている) お前は生きたいと思っている！ それなら、生きるがいい！ 生き続けるがいい！ しかし、子供は俺が育てる！

お前のかわりに、俺が育てる！ 彼が十七、八歳になり、むき出しの肩に顔を赤らめたり、丸い胸の盛り上がり息を詰まらせるようになったら、俺は彼に言うだろう。「眼を伏せるな！ 空腹や喉の乾きや生理的欲求と同じように、

衝動を恥じる必要はない！ やつらを追い求めろ！ 心ゆくまで味わい、飲みつくすんだ！ 衝動のおもむくままに振る舞え！

(デジレーは、打たれたようにビクッとする)

だが、寢床から起き上がるのを忘れるな。そして、笑うんだ！ 食事を終えたら、立ち上がれ！ やつらは、お前にとって、それ以上のものではありえない。やつらに、暗い夢の説明を、永遠の安らかな憧れを求めるな！

(残酷さに酔ったように、次第に早口になる)

言葉やまなざしでお前に献じられたものは、どんなにその呼び名が変わろうと、夜も昼も火を絶やすことのない暗い厨房で作られた、同じ料理なのだ！ やつらに、愛玩犬のように、絹のクッションや甘いものを与えてやれ！ そうすれば、やつらは階段を駆け降り、路上の汚物にまみれてむさぼり食うだろう！ やつらは野獣なのさ！ すると彼は言うだろう。「お父さん、皆が皆そうではないんでしょう！ あなたのお母さんもそうじゃないだろうし、僕のお母さんだって・・・」そこで俺は言うだろう。

(肩をすくめて)

「わしの母親のことは知らんが、お前の母親はそうだったな！」

デジレー：

(最後の言葉を聞いて、鞭打たれたようにビクッとする。首を激しく揺すって)

何てことを！ あんまりです・・・

(探るように辺りを見回し、窓に通じる階段を駆け登って、窓を押し開ける。裁判長は、彼女を引き戻し、彼女の抵抗を抑えて、しっかり抱き締める)

放して下さい！